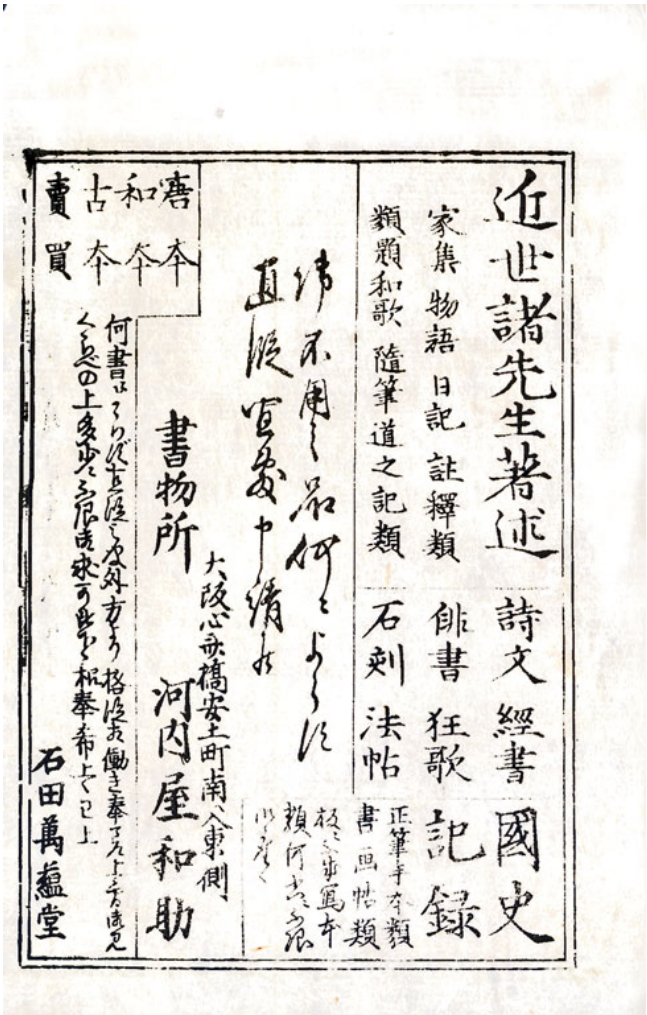
2012年後期　**江戸の本づくり**

第２回　江戸の本屋のありかた

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

江戸時代の本屋は何でも扱う

江戸時代の本屋の仕事は、本を出版するだけではなかった。自店の本を卸売販売しながら、他店の出版物を含めた新刊書の小売のほか、古本の売買から貸本（かしほん）の兼業、板木（はんぎ）の売買、中国から輸入した唐本販売までする、いわば書籍の総合商社的存在だった。今日でいう出版社＝版元（はんもと）、取次（とりつぎ）、新刊書店、古書店すべてを一軒で行なっていたのだ。



右の図は、ある本の巻末にあった大坂・心斎橋安土町の本屋・河内屋和助の広告。
「近世諸先生著述……」と各種の店に置いてある本の分野を示したあと「御不用の品何によらず直段宜しく申し請け候」とあり、ご不要の本は何でも値段良く買い取ります、といっている。「唐本和本古本売買」とあり、唐本も和本でも古本を売買することを宣伝している。

このほか、書画、紙や文房（筆・硯など）、絵半切（えはんぎれ　絵入の書道や手紙のための帳面）を売るし、本の仕立て直しを請け負うこともする。
*江戸時代の本屋は、屋号・通称名・堂号（どうごう）・姓をそれぞれ持っていた。河内屋＝屋号、和助＝通称、堂号・万蘊堂（まんうんどう）、姓＝石田）。ふつうは屋号＋通称名であらわす。

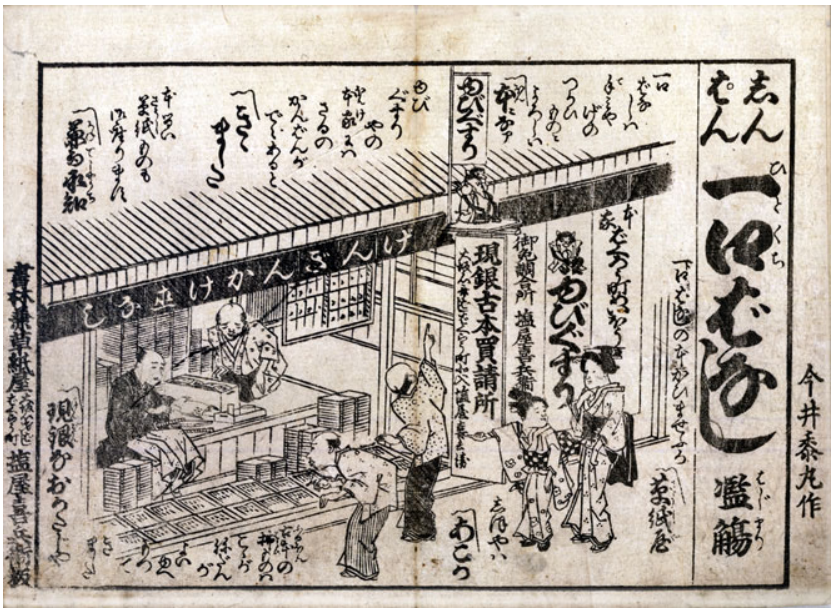
本屋の店先

本屋はできるだけ店内を往来からよく見えるようにするため、長暖簾でなく短い軒暖簾（のきのれん）にして、そこに屋号や店の別名である堂号（どうごう）、商標（店のマーク）などが染め抜かれていた。今でも東京・神田神保町の古書店街は店先が北向きか東向きになるように並んでいるように、できるだけ日の当たらない方向に向けるのが鉄則である。とくに西日をきらう。

往来（道路）側には本屋を示す「出し看板」を置く。そこによく「古本売買」などと書かれている。この看板は店側の一方には小窓がくりぬいてあって、道行く人がそこへ紙屑などを捨てた。その紙屑は反古（ほご）紙として集められ、漉（す）き返（かえ）されて再生紙となる。

本をたくさん並べて手にとって見られるような今の本屋の置き方（出し本）は、草紙屋（大衆本の専門店）だけで、堅い本を扱う店は、掛（かけ）看板　吊（つり）看板という売り物の書名を書いた看板を何本も掛けておく。
草紙屋はさらに錦絵（色刷りの浮世絵）をたくさん吊るすなど、いちだんと派手である。

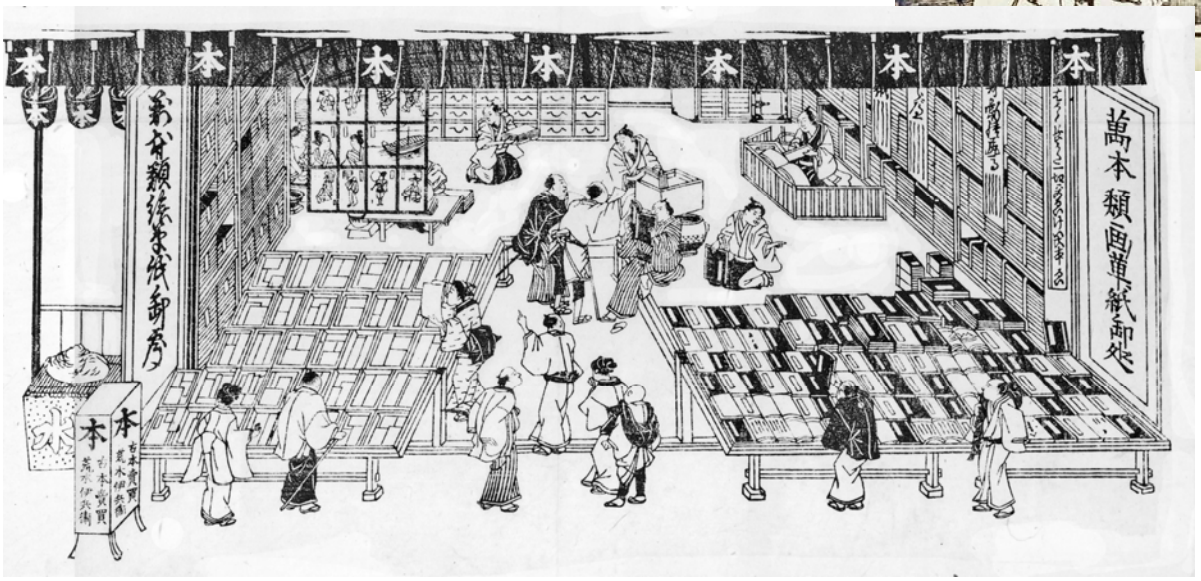
店内の奥には囲いがあって、そこに主人が座る（**次頁の下段の図の右奥**）。客の応対は手代や番頭が切り盛りし、よほどの上客でないかぎり主人は出ないものである。店先で何々の本はないか？と尋ねるのがふつう。


今井泰九作
現銀古本買請所
塩屋喜兵衛

書
籍
古本賣買
御書物處
水

繪草紙店
耕書堂
忠臣大星水滸傳
東都名所一覧
狂歌千歳集

書林
本


本
萬本類面草紙卸処
本類絵草紙卸売

江戸の古本屋

古本屋という独立した店はなく、古本は本屋（**書物屋、書林、書肆**（しょし）などともいう）の業務の一部である。日本人にとって、書物というものは、読み終わったら捨ててしまう性質のものではない。書物は保存しておく、というのが平安時代以来の伝統である。印刷物が多量につくられるようになった江戸時代でも、一冊の書物がただ一人の読者だけで終わってしまう、ということは稀である。ほとんどの本は、幾世代にもわたって人から人へめぐっている。現代は本を買った個人の所有物であり、大半は捨てられる。

江戸時代にはたくさんの本が出版されてきたが、それでも、より深い知識の集積のためには十分な数ではない。その足りないところは、かつての書物で補わなければならない。絶版品切れになったもの、本屋でなく自費で刊行したような**私家版**（しかばん）、印刷されなかった**写本**などを幅広く集めることになる。充実した本屋ほど、新刊、古本、写本を交えて品揃えをしていたのだ。

古本の符牒（ふちょう）

現在残っている和本の裏表紙をめくってみると、筆で何やら記号のようなものが書かれている。これは古本の符牒で、仕入れ値をカタカナであらわしている。

１から 10 を「オコソトノホモヨロヲ」などとし、一般人にはわからないようにする。

売値はこれを店の者が見て、一定の利益を乗せて口頭でいうのがしきたり。

大正年間にまだ古書店だった岩波書店が、すべての本に正札をつけて、正価販売をするようになるまで続いた。

古本の市場

古本の仕入れ先は、基本的に一般顧客から買い取る。広告で「値段よろしく買う」とか「現銀かけなし」などといっているのは、その宣伝である。

蔵書の多い家には、本屋がとりにいき、まとめて買う。

買い取った古本は、整理され、きれいに仕立て直して店に出すが、その店に向かないものや専門の店に売った方が高くなるものもある。たとえば、俳諧書は専門店に行くと、何百種類もの本が並んでいて、珍しい本は高い。逆に、俳諧の得意な店に仏教書が入って来ても売りにくい。

そうした本屋同士の融通のために古書の市場が生まれた。

江戸時代の 18 世紀中頃には、本屋の集団である本屋仲間が古書市場を開いた。市場を運営する店（**市屋**）に正式に認可して公正を期した（**市株**）。江戸・京都・大坂で確認されている。

このほか、私的な市場もできて、親しい本屋同士、書画や骨董の市、草紙の市もあった。とくに、長崎で輸入された書籍（唐本）は、必ず市場を通して流通した。

方法は**入札**（いれふだ）方式か**セリ**である。

本屋の財産である板木も公式な市場で入札された。ここで買った板木は、本屋仲間が公認したものなので、出版権の移動が保証された。

この古書市場は現在でも全国に存在していて、東京では神田に**古書会館**があり、毎日開かれている→右図。

講義の要旨は pdf にするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tang/でダウンロードを。

質問は、専用メールでいつでも。　khashi@s.email.ne.jp